

1. アンケートに対する学生の取り組みおよび周知方法について

- 2015年4～5月実施調査（2年生以上対象）の全学平均の回答率29.2%や前回2015年1～2月実施の調査（1年次生対象）の回答率44.5%に比べて、今回28年1～2月実施（1年次生対象）の回答率は73.5%と高く、本調査が次第に浸透してきたこと、および各学科長等の周知努力を窺うことができる。学部ごとの回答率は、経済68.8%、人間文化55.7%、工70.0%、生命工76.6%、薬88.3%であった。

2. 学修支援相談室をはじめとする大学教育センターの学修支援体制について

- 大学教育センターが展開する各種の学修支援相談を「まったく知らない」と回答した学生は、前回の16.3%から今回の9.6%に低下し、いくぶん認知度が高まったように思える。とくにe-ラーニングシステムを知っていると答えた者は50.7%と、学修支援相談室そのもの20.7%や数学基礎力UP講座19.1%に比べて高い比率を示した。学修支援相談室の存在を知っている者に関して、「たまに利用している」10.9%も含めて、利用度はいくぶん向上したが、まったく利用したことがないが78.6%と依然として高く、さらなる周知改善の余地がある。
- 学修支援相談を「まったく利用したことがない」と答えた学生に関して、「個別相談に不安（抵抗）がある」「他人に知られたくない（周囲の目が気になる）」は、それぞれ前回の12.6%から6.7%、4.3%から2.1%へと低下した。一方、「利用する必要がない」とした者の比率は、前回の25.6%から32.9%へ上がった。優秀な学生のレベルアップを視野に入れていることの学生への周知をいっそう図る必要がある。数学基礎力UP講座を利用したことがない学生については、「場所が分からない」と回答した者が34.3%と高くなっている。
- 高校までの科目を復習する授業に必要性、つまりレメディアル教育について「必要である」「まあまあ必要である」と答えた者は、前回の81%から77.3%と若干低下したものの依然として高く、特に、英語・数学について必要と思っている学生が、それぞれ19.8%、18.1%と多い。

3. 語学・リテラシー関連科目について

- 「共通教育科目の中で充実していると思われる科目群」についての質問に対して、英語は前回の13.3%から15.6%へ、初修外国語も6.8%から8.5%へと向上し、

担当教員の努力の結果を垣間見ることができる。

- 「日本語表現法」に関しては、①共通教育科目群の中で、「充実していると思われる科目」として挙げられた比率が前回 15.4%から今回 13.1%へいくぶん下がったものの、「とても満足」24.1%「ある程度満足」42.2%と、かなりの満足度が認められた。
- 情報リテラシー科目については、「とても満足した」が前回の 16.6%から 22.6%へ上昇し、「あまり満足しなかった」「まったく不満だった」は、それぞれ 3.8%、2.0%とごく限られている。「ICT を使用して情報収集・分析・処理能力が身に付いた」「ICT を使用する技能がみについた」などの面で、前回より好意的な評価が見られる。
- 英語は「とても満足」が前回の 12.7%から 19.3%へ上昇し、比較的高く評価されているが、「今以上の時間数や高度な内容」、「今より少ない時間数や内容」がそれぞれ 14.9%、13.4%と拮抗している状況は前回と同じである。
- 初修外国語も「とても満足」「ある程度満足」が、それぞれ 23.9%、40.3%であるが、「今より少ない時間数や内容でよい」とする者の比率が、前回の 8.9%から 14.4%に上昇しており、授業内容や方法に改善の余地がある。

4. 教養科目の充実について

- 教養科目の充実度を尋ねた項目への回答を見ると、E 群（芸術と健康・スポーツ）が充実していると答えた者の比率が 12.9%と高いのを除き、B（社会構造と生活）、C（歴史と文化）、D（思索と創造）、F（地域学）群についてはいずれも前回より「充実している」と思う者の比率が上昇したものの、その比率は数%であり、群の統廃合および授業内容の改善討も含めて、再検討を要する。「単位稼ぎと時間割の穴埋め」と回答した学生が 20.2%にのぼる。
- 初年次教育科目（教養ゼミ）について「良かった点」として挙げられた各項目の比率は、「課題探求力が身に付いた」の 5.5%から「高校生活（学習）から大学生活（学修）へスムーズに移行できた」の 14.6%まで、全体として未だ低く、その一方で「特に改善点はない」（39.7%）と受動的であることから、提供する側がより魅力的な授業内容について考慮する必要（挨拶・礼儀・マナーなどではなく、高大接続の観点から）がある。
- 教養講座に関して、「知的好奇心をくすぐった」と回答した者の比率が前回の 18.8%から 14.5%に低下し、一方「難しい内容の講演が多かった」が 10.3%から 14.8%に上昇したことから、講師選定などの面で検討を要する。

5. キャリア科目について

- キャリアデザインⅠに対して「とても満足した」「ある程度満足した」と回答した者の比率が、前回に比べて、11.0%から13.6%、31.0%から36.2%へと、いずれも上昇したことから、授業内容・方法上の改善が行われたことが窺える。一方、「今より少ない時間数や内容でよい」が23.3%、「まったく必要性を感じない」が11.4%であり、学生に未だ重要性が認識されていない可能性もある。同科目の良かった点は「特になし」(21.2%)という設問33の回答結果より、本学のキャリア教育全体としての目的を再度確認し、重点的に取り組む領域を絞り込む必要がある。また、多人数授業で必修科目のキャリアデザインⅠの内容と、選択科目(工学部のみ選択必修)で受講意欲の高い学生が集うキャリアデザインⅡ～Ⅳの内容は大きく異なっており、Ⅰしか受講していない学生にⅡ～Ⅳの受講意思を尋ねることの妥当性は検討課題として残るが、少なくともキャリアデザインⅠの内容精選とⅡ～Ⅳの目的や内容を伝える方法や施策を要する。

6. 学生の学修意欲について

- 学修意欲に前年よりも若干低下の傾向が見られる。入学当初から低い(「まったく意欲なし」が約3%)上に、入学後に下がる傾向にある。少なくとも低下させない方策の検討が必要であるが、学修意欲については、共通教育科目が多い1年生に特有の問題か、専門科目も含めた問題かを考えるために、2年生以降の推移も見る必要がある。